

テーマ: I 基本の復習  
II 「敬虔」について  
III 「聴く」ことについて

I 基本の復習

I-1 《聖歌の基本概念について》

イコン画家の目的が、ファヴォル山における主の顕栄の輝きを表すことであるとすれば、聖歌者の目的は、天の宝座の前で神を讃栄している神使の歌声を表すことである。これが、聖歌の基本概念となる。

「神使のごとき歌」の重要な要素は、「神の恩寵に満ち、聖神<sup>o</sup>性高く、神使のような響き」を持つことであり、その目的は、霊を神の世界との調和へ導くことである。

I-2 《正教会の様式について》

古い伝統を持つ私たちの正教会においては、教会建築とイコンと聖歌の関連性ということがよく言われる。なぜ、この三つの芸術に関連性が見られるのか。それはこの三つが役割において一つの大きな共通点を持っていることと無関係ではない。その役割とは、これらの芸術が個人的な喜怒哀楽や情感を表現することよりも、奉神礼儀(богослужение)という祈りの場に奉仕することを優先するという点にある。ここから聖歌においては、その音楽様式が表現方法においても、形式においても自ずと定まってくる。これを「厳格な教会様式(строгий церковный стиль)」と言う。

I-3 《八調について》

「奉神礼儀に適した音楽として、生き活きとして、明るく、喜びに満ちており、悲哀や憂鬱とは無縁の音楽であり、その音楽は従順、謙遜、神を畏るる心を表すことにおいて卓越している」(1977年モスクワ総主教庁『神品机上本第一巻』中の「教会聖歌と誦経」の項より)。

I-4 《聖歌の伝統継承について》

「日頃、私たちの歌っている聖歌をより深く理解するためには、聖歌をその今日ある姿においてのみ知るのではなく、1000年にわたる歴史を可能な範囲で知ることが必要である。即ち私たちの聖歌が今日までに辿ってきた道を知ることである。なぜならば、これを知ることにより初めて私たちは、現在の聖歌を真に正教の奉神礼儀のための聖歌であるべく守ることができるのである。聖歌は、過去との繋がりを断絶して理解されてはならない。過去の伝統を守り、しかも今日の聖歌として生きていなければならない。その際に重要なことは、聖歌の本質から決して外れないこと、即ち時代の流行や芸術的な美しさや個人的な趣味に流されず、奉神礼儀のための聖歌のあるべき姿を守ることである。」(『ロシア正教会聖歌の歴史』I.A.ガードナー著の序文より要約翻訳)

## Ⅱ 聖歌者に必要な資質としての「畏れ」と「敬虔」

### Ⅱ-1 《智恵の始めは主を畏るる畏れなり》

「智恵の始めは主を畏るる畏れなり。其の誠を守る者は明智なり。その讚美は長く存せん。

(第110聖詠10節)

「畏れて主に勤めよ、戦きて其前に喜べよ」。(第2聖詠11節)

「神を畏るる心と信とをもって、近づき来たれ」。(聖体礼儀より)

聖金ロイオアンは、「神を聖歌をもって讚美する時に、あなた自身が大きいなる畏れに戦き、敬虔さをもって身を飾って欲しい」と言っている。

畏れ(страх)と敬虔(благоговение)。これは、聖金ロイオアンばかりで

なく、多くの聖師父たちが、公祈祷における聖歌に対して要求する霊的資質である。何故ならば、イコンが「色彩の内に表現される神学」であるならば、聖歌は「音のうちに表現される神学」であるからだ。正教の聖師父たちが確立した聖歌は、祈祷文においても旋律においても卓越した神学者の祈りの結実である。従って、それらを真摯に歌う者にとっては、霊の救いのために十分な信仰を得る源となる。

聖歌における畏れと敬虔という資質は、聖歌者にとっては旋律や技術に関する問題ではなく、霊の祈りの実践に関する問題である。

神への「畏れ」について聖師父は次のように教えている。

「神と人間との関係には、三段階ある。一つ目の段階は、主人と奴隷の関係。奴隷は主人から罰を受けまいとしてただ盲目的に主人に従う。二つ目の段階は、雇い主と雇い人の関係。雇い人は、雇い主と契約した報酬をもらおうとして雇い主に従う。三つ目の段階は、父と子の関係。子は父に喜ばれることを行おうと願い、父を悲しませることを畏れる」。神を畏るる心とは、神を悲しませることを畏れる心であり、聖なるものを冒瀆することを畏れる心である。

聖体礼儀の中では、領聖前に「聖なるものは、聖なる人へ」という祈祷文がある。これに対して聖歌隊は「聖なるはただ一人、主なるはただ一人、神・父の光栄を表すイイスス・ハリストスなり」と応える。教会において最も聖なるもの、もっとも大切なものである主の尊体と尊血。その領聖を前にして「この聖なるものは、聖なる人に相応しいものである」という言葉に対して、信徒を代表した聖歌隊が「聖なるものはただ主イイスス・ハリストスだけです」と応えているのである。これから領聖する自分がこの「聖なるもの」に相応しいかどうか、各自が聖体拝領を前に最後の心の準備をする時である。

神を畏るる心と敬虔さは、聖なるものには如何に接するべきかという認識から生まれる。

聖なるものに相応しい人間のあり方(態度)を正しく教えることは、正教会の伝道の基本である

ブラヴァスラーヴナヤツェールコフイ  
(「正教会(Православная Церковь)」とは、「神を正しく讚美する教会」の意味)。

ニッサの聖グリゴリイは、聖歌は、その聖歌を聴く人に「然るべき信仰の範」を与えていると言っている。「然るべき信仰の範」とは、「聖なるものへの正しい人間の霊のあり方」、「正しい祈り方」と言い換えることができる。

そのような聖歌を実現するために聖金ロイオアンは「私たち自身が、神・聖神<sup>o</sup>の笛となり、キタラ(当時の弦楽器)となろう。楽器を調律するように、神・聖神<sup>o</sup>によって自分の霊を調律しよう。それが私たちの霊の弦を奏でてくれるように」と言っている。ここで大切なキーワードは「霊の調律」である。私たちは、音叉によって絶対音の「c」(又は「a」)を得て、正しい調に乗ることができる。同じことが祈りについても言える。正しく主・神の声を聞くためには、その声と同じ周波数で反響する霊を自分の内に調律しておかなければならない。

このような聖歌者に対する霊的な資質の要求は、古代においては厳しく行われていた。聖大ワシリイ(4世紀)は次のように言っている。

「神の家である教会において奉神する者は、悪口を言う者、酒に酔う者、喧嘩っ早い者、若気の過ちに陥り易い者でないように、厳しくその素行を見極めなければならない」。

古代においては「教衆」の立場としての性格がより鮮明だった聖歌者、信者を祈りの気持ちに「調律」する「音の神学者」である聖歌者 — これらのことを十分に理解できる者にとっては、次の指摘は厳しいというよりは当然のものと受けとめられる。

「信仰に興味が無い者、敬虔ということに無頓着な者が聖歌を行った場合には、奉神礼全体の雰囲気<sup>ヴェーラ</sup>に破壊的な影響を与えることがある」(サマラ正教神学校誌『信仰(B e p a)』2001年 No.1)。

聖歌者の為すべきことは、「教会の奉神礼や規則を単なる儀式として理解し、形だけを模倣するのではなく、自分のうちに「霊的な音階」を作り出すことである。その音階の階段を昇って、私たちの霊が天の国に導かれるために」(V. I. マルトィノフ)。この「霊的な音階」こそが、聖歌の基本概念である「神使の歌声」と調和する「音階」である。

これが、聖歌が単なる楽譜に書かれている音楽記号や音楽規則の演奏に留まらない理由である。聖歌の目的は、楽譜上の調和(ハーモニー)を目指すことだけではなく、楽譜を超えて神使の歌との調和(ハーモニー)を実現することにある。

教会の祈祷に立つとき、聖歌者が常に念頭に置くべきことは、今自分の行っている聖歌が、聖歌の目的に適っているのかどうか、即ち宝座の上で見えずして主・神を讚美している神使等の歌声と調和しているのかどうかという霊的な聴覚の働きである。

## II-2 付録資料

以下は、2008年11月に行われた北海道ブロック誦経者研修会資料「誦経者の心得」。正教会では、誦経者と聖歌者は同一の役職とみなされ、「誦経者の心得」はそのまま聖歌者の心得として当てはまるため、聖歌に携わる方々の参考までにこれを要約・引用した。

### 誦経者の心得

(主や我が唇を啓けよ然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす  
／第50聖詠17節)

全地公会の聖師父たちは、教会における奉神礼の規律について常に注意を促してきた。その根拠は、福音書に記されているように、主ハリストスが神の宮を商売の巢窟にしていた人々を追い出したできごとに見ることができる。

教会の中で行われることは、全て教会規則及び奉神礼規則にのっとっていなければならない。神品教役者も信徒も教会内においては「敬虔で規律正しく」なければならない。自分勝手な解釈や好みを優先してはならない。初代教会時代、世界各地に主ハリストスの教会が現れ始めたとき、使徒たちはこれらの教会の規則に従順謙遜に従うことを全ハリスチアニンに厳しく指導した。

ロシアにおける共住修道院の長老制の祖である聖イグナティ・ブリャンチャニノフ(†1867)は、修道志願者たちにつきのように教えている。

「誦経者は、必ず事前に予習をすること。奉神礼中に無駄な空間を作ったり、訂正を行なったりすることなく、必要な箇所をすぐに開くことができるために」。

更には、誦経箇所と祈祷書に通ずるだけでなく、誦経している祈祷文について、己の霊の中に「知恵と心の実り」を抱いていなければならない。

即ち、古代より誦経者に要求されることは、経験と敬虔、そして読まれている祈祷文の内容を参拝者に正しく伝えることができる能力である。

また、誦経者が教会内の奉神礼において祈祷書を用いるときに留意すべき点は、祈祷書に書いてあることが優先するのではなく、司祷者である神品の指示が優先するという点である。なぜならば、司祷者は、主ハリストスによって立てられた主教品の祝福を受けてその勤めに当たっているからである。

参考文献:『神品机上本第一巻』(奉神礼の規律・誦経の項)

(資料作成:司祭ニコライ・ドミートリエフ)

### Ⅲ ご祈禱を「聴く」ことの大切さ

#### Ⅲ-1 《蓋文は死し、神<sup>°</sup>は生かすなり》 (コリンフ後書3;6)

上記のコリンフ後書の引用は、聖使徒パウエルの言葉です。しばしば引用される一節ですが、聖歌者にとってこの一節を正しく理解することは、とても重要なことです。

この聖書の箇所の前後関係は次のようになります。

「爾等は、乃我等<sup>ふみ</sup>の書、我が心<sup>しる</sup>に書されし者、衆人の知るところ、読む所の者なり。爾等は明らか<sup>ふみ</sup>に己がハリストスの書にして、我等の役事<sup>えきじ</sup>に由りて、墨を以てせしに非ず、即ち活ける神の神<sup>°</sup>を以てし、石碑の上に非ず、即ち心の肉碑の上に書されたるを示す。我等ハリストスに頼りて、神の前<sup>よ</sup>に此くの如き信あり。此れ我等が能く己に由りて何をか思ふこと、己に由るが如くするに非ず、乃我等の能くする所は神に由るなり。彼は我等をして能く新約の役者<sup>えきしや</sup>と為らしめたり、即ち文に非ずして、神<sup>°</sup>の役者なり、蓋文は死し、神<sup>°</sup>は生かすなり」。(コリンフ後書3;2~6)

もちろん主・神の啓示や聖師父の教導を文字にすることには、それなりのメリットがあります。モイセイが受けた十戒は、文字で記されていました。聖書も文字で印刷されているおかげで、多くの人がその内容を知ることができます。聖歌も、もし「音」だけが頼りであれば継承することは至難であろうけれども、祈禱書や楽譜があるおかげで正しいお祈りを行うことができます。

しかし一方、私たちがどんなに文字を尽くしても「一つの神・父、全能者」を書き表すことはできません。なぜならば、「神は神<sup>°</sup>」だからです。人間が現在コミュニケーションのために使っている言語は、神を語るには不十分です。人間の歴史の中で唯一神と直接顔を合わせて「話」ができたのは、私たちの最初の祖先であるアダムとエヴァだけです。(おそらくそのときの「話」において使われた言語は、現在の私たちが用いているような言語とは異なるものであったはずです)。

日本での聖歌譜は、一つのご祈禱を始めから最後まで一冊の本のようにまとめがちで、普通このような形態のものを「きちんとした」聖歌譜とみなしているところがあります。ロシア正教会では、ご祈禱の始めに聖歌隊に立つ聖歌者の前には、本も楽譜も何もありません。必要に応じて、「大連禱」、「ヘルヴィムの歌」、「親しみの捧げもの」などの聖歌譜が“単品”で配られます。その楽譜に書かれた部分を歌い終わると楽譜を係り(у с т а в ш и к)に返します。そこには、連禱も、誦経も、神品の発放も書かれていません。これらは「読む」ものではなく、「聴く」ものだからです。従って、自ずと目は聖堂の中で行われている出来事に向けられます。

正教会の奉神礼は、参禱者の霊を天の国との調和に向かわせるために、様々な人間の感覚に訴えます。例えば、神品の祭服の色やろうそくの灯りは視覚に訴えます。聖歌や鐘の音は聴覚に訴えます。大齋期と復活祭期の差に顕著に現れるように乳香の香りは臭覚に訴えます。糖飯の味は味覚に訴えます。このように豊かな伝統と深い意味が込められた聖堂での奉神礼は、人間の全ての感覚を全開して吸収しようとして余りあるものです。

残念なことに、祈祷中の文言を一字一句網羅した「聖歌譜」が目の前に終始開いてある聖歌隊に居る聖歌者は殆どの場合、これらの多くを素通りしています。奉神礼は、祈祷文の「読み合わせ」に化し、紙の上の文字と音符に全ての注意力を吸い取られているために、聖堂内に響く音は「ラジオ」を聞いているに等しい状態です。

ロシアのある修道院の長老であった聖人は、「大きい聖堂で参拝者がひしめいている時、福音経を誦読する声もよく聞き取れない場所にしか立つことができなかつたら、どうしたらよいか」という巡礼者の質問に対して、「そのような時は、静かに自分の心の中で『主、憐れめよ』と繰り返して祈りなさい」と答えています。つまり、「携帯用の聖書を持参して、誦読している箇所を開けて読みなさい」とは答えていないのです。聖堂の中で聞こえる「音」は、やはり「読む」ものではなく、「聴く」ものなのです。ここには、理屈では説明できない真の「祈り」に練達するためのエッセンスがあるように思えてなりません。

同じように、聖体礼儀において説教を聴く時、どんなに優れた説教でも、聖堂でペンとメモ帳を取り出して説教をメモし始める人はいません。どこに規定してあるわけでもないのですが、説教とはそのようにして聴くものではないことを信者が感じているからです。聖堂での説教は、信者を救いの道に導くための特別な力を持っています。この言葉は(もっと正確に言えばこの言葉の持つ力)は、紙の上に文字で書き留めるものではなく、コリンフ後書にあるように、まさに自分の「心の肉碑」に刻み込むべきものだからです。

正教会の奉神礼の中には、信徒が耳で聞くことのできる祈祷文の他に、神品の祈祷として黙誦文があります。これは、「黙誦」することに意味があり、またそのように定められている祈祷文ですから、神品機密を受けている神品にお任せするものです。この間、聖堂では聖歌隊が別の言葉の祈祷文を歌っている場合が多いのですが、この黙誦の祈祷文に大変大きな力があります。この「黙誦」の祈りは、私たちの知らないうちに聖堂のイコンに、壁に、参拝者の心に沁み込んでいきます。またパンとぶどう酒を、主ハリストスの尊体と尊血に変えます。

つまり、聖堂での全ての祈祷の言葉は、生きているものであり、神・聖神<sup>o</sup>の力をもって人間の霊や自然界をはじめ「見ゆると見えざる万物」に作用するわけですから、言葉であって言葉でないようなものとなります。このような言葉を、その“本番”中に紙の上の文字で“確認”している場合では無いのです。

日本の教会の事情として、一年間に数回しか聖体礼儀が無い教会があります。このような場合には、たとえご祈祷に皆勤している人でも、全てが書いてある楽譜でなければ、どこで何を歌っていいのかわからないという現状があります。そのような教会では、その教会の事情に合わせた楽譜が必要です。しかし、多かれ少なかれあるべき姿を守ることができる条件が整っている教会の場合には、聖歌隊における祈祷のあり方について正しい認識を持ち、教会の祝福の下に、さらにステップアップし、ブラッシュアップしていくことが望ましいでしょう。

(資料作成：講師 スヴェトラーナ 山崎 瞳)